

新しい農地の開発を目指した前進的な小規模集落とが併存する状況を示している。また、集落内の施設では、この時期に方二間の総柱または方一間の掘立柱建物が増加する。これらの多くは高床倉庫と考えられ、家父長層の富の蓄積を裏付ける施設である。

終末期の集落

中期から後期にかけて継続して営まれていた集落は、七世紀前半代に衰退しいったん姿を消すものが多い。下稗田遺跡・源左工門屋敷遺跡・タカデ遺跡・荒堀中ノ原遺跡などがこの傾向を示す。また、渡築紫遺跡・谷遺跡の集落は七世紀後半まで継続している。安武・深田遺跡の場合、七世紀に入ると大規模集落が突然消滅し、七世紀末から八世紀前葉にかけて再び小規模な集落が営まれている。

一方、七世紀前半代に新しく形成される大規模集落もある。豊津町金築遺跡は遅くとも八世紀後半代に豊前国の行政の中心地である豊前国府が建設される場所に広がる七世紀から八世紀にかけての集落で、住居跡が六五軒確認されたが、発掘調査地区外も含めると一〇〇軒前後に達すると推定される。

当地域ではまだ豪族の居館は発見されていないが、一般集落内では六世紀後半代には下稗田遺跡古・I・47号住居跡、同古・I・52号住居跡のように、一辺の長さが七メートルに達する大型の竪穴住居が現れる。

三 その他の遺跡

当地域の生産関係遺跡としては、須恵器を生産した窯跡や製鉄を行った炉跡が発見されている。

第4章 古墳時代

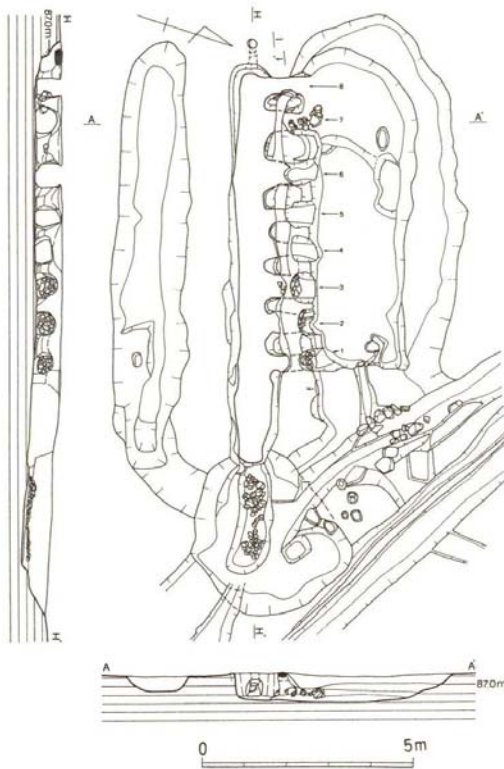
須恵器の生産

朝鮮半島の陶質土器に起源を持つ須恵器は、畿内を中心に五世紀前半に生産が開始されるが、当地域でもこの時期にいち早く窯が作られている。豊津町居屋敷遺跡の窯跡は、北部九州でも最古の時期に属するもので、初期の甕がほぼ完全な形で出土している。

築城町茶臼山東窯跡は六世紀後半のもので、窯跡は三基確認されている。当遺跡が所在する船迫南東部の丘陵地帯は、その後奈良時代になっても豊前国分寺の瓦を生産しており、豊前国北部の代表的な窯業生産地である。新吉富村山田窯跡は七世紀前半代に操業が開始され、隣接する同村友枝瓦窯跡などとともに、須恵器や瓦を生産した窯跡である。山田1号窯跡は半地下式の「登り窯」で、焼成部が約六・四メートルのみ残存していた。

鉄の生産

築城町松丸F遺跡は城井川中流域の標高八七メートル前後の丘陵先端部に位置する。时期的には七世紀初頭から七世紀末にかけて継続し、製鉄炉一基と燃料の炭を焼いた窯跡六基など



第53図 築城町松丸F遺跡1号窯跡

が発見されている。炉跡は底部が全長一・四メートル、幅〇・三〇・五五メートルの長方形箱形炉である。炉の周壁は高温を受けて青灰色に変色し、その外方も赤変している。窯跡は六基とも側面に八個の開口部を持つ横口付窯跡で、1号窯跡は九・四メートルの窯本体に〇・七メートルの煙出しがつくものである(第53図)。なお、1号炉跡近くの土壌には原材料となる三七・三グラム三グラムの砂鉄が保存されていた。松丸F遺跡で発見された大型の箱形炉は、東北地方を中心に七・八世紀代にみられるが、西日本では中国地方を中心に江戸時代のたたらへと発展する形式の炉である。

第五節 北部九州の古墳文化

一 古墳の出現

北部九州は倭国内でも中国や朝鮮半島に地理的に最も近く、弥生時代以来新しい技術・文化の受容に際して窓口となってきた。また、大小の河川の沖積作用によって各地に平野が形成され、稲作を中心として農業生産力も高く、弥生時代後期には「クニ」と呼ばれる各平野程度の広がりを持つ地域単位で有力な首長層が成長していた。この状況は古墳時代に入っても受け継がれ、各平野を代表する首長層は前方後円墳などの古墳を築造している。ここでは、豊国・筑紫国などの地方を中心に、古墳時代を概観する。